

## 教員養成における『野外活動』に関する研究

河野 志保\*・高橋 泰道\*\*・杉山 浩之\*\*・吉田 裕午\*\*

Study on “Outdoor Activities” in Teacher Training

Shiho KAWANO\*, Taidoh TAKAHASHI\*\*, Hiroyuki SUGIYAMA\*\* and Yugo YOSIDA\*\*

キーワード：野外活動、自然体験、教員養成、カリキュラム編成

### 1. はじめに

現在、子どもたちの自然体験の機会が減少していることが問題となっている。そのため、平成20年の小学校学習指導要領（文部科学省、2008）においても、生きる力を養うための体験活動の1つとして「自然体験」が加えられており、現在、自然体験の意義や可能性についてより重視されている。

一方、「新しい時代に求められる青少年教育の在り方」（中央教育審議会、2008）において、「青少年の『生きる力』を育む上で、自然体験をはじめ文化・芸術や科学などに直接触れる体験的な学習活動等の重要性が高まる中、機会の減少、適切な指導者が乏しいことから、指導者の養成が新しい時代に求められていること」が課題として挙げられている。これらのことから、児童が豊かな自然体験をするためには、教員自身の体験不足を補っていく必要があると考える。

そこで、本研究では、小学校で行う自然体験の1つである野外活動に焦点をあて、指導者である教員が児童の自然体験の手助けをする際に、どのような指導能力が必要なのか、また大学の教員養成過程における野外活動の授業において

何をどのように身に付けることができるのかについて考察することを目的とした。

### 2. 自然体験と野外活動

#### 1) 自然体験と野外活動の意義と位置づけ

自然体験について、渋谷（2006）は、「自然の中で自然を活用しながら、体や五感を使って行われる活動」と定義している。

野外教育については、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）では、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と捉えている。なお、自然体験活動とは、「自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動」であり、野外活動は、「自然体験活動を取り扱う教育領域であると位置付けることもできる」とも述べている。

野外教育の意義は、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われること」であり、自然体験の意義は、「様々な感覚を働かせ、学ぶため児童生徒の『生きる力』を育成することができること」である。また、野外活動

\* 本学初等教育学科33期生

\*\* 本学教授

とは、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる」野外教育の中に、「自然の中で、自然を活用して行われる」自然体験活動があり、その中の「自然体験活動を取り扱う教育領域」として位置付けられている。

野外活動の意義は、以下の通りである。

- ・ 野外活動は、「生きる力」を養うために、教育活動の中でも効果的な活動である。
- ・ 野外活動に期待される成果については、大きく分けて以下の8つの成果があり、どれも「生きる力」を養うためには必要な能力である。

- ・ 感性や知的好奇心を育む
- ・ 自然の理解を深める
- ・ 創造性や向上心、物を大切にすることを育てる
- ・ 生きぬくための力を育てる
- ・ 自主性や協調性、社会性を育てる
- ・ 直接体験から学ぶ
- ・ 自己を発見し、余暇活動の楽しみ方を学ぶ
- ・ 心身をリフレッシュし、健康・体力を維持増進する

## 2) 野外活動指導能力

野外活動を指導する上では、教員養成系の学生が参加する野外活動において、「野外活動指導能力」を高めることが大切である。別惣・長澤・上西・一山（2003）は、自然体験活動指導に求められる教員の資質能力について、以下の7つの能力に整理している。

- (1) 自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力
- (2) 安全管理や安全指導の能力・知識
- (3) 自然体験活動に関する知識
- (4) 自然体験活動のための企画・指導技術
- (5) プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力
- (6) 自然体験活動への関心・意欲
- (7) 体力・健康

7つの能力の詳細は以下の通りである。

- (1) 自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力

- ・ 子どもの指導への意欲・主体性
- ・ 参加する子どもたちをまとめる能力

- ・ 子どもに生活習慣、社会的ルールを指導する能力
- ・ 目標達成のための連絡調整能力
- ・ 自然体験活動プログラムの企画・運営に対する教員間の共通理解
- ・ 子どもへの指導に関する知識
- ・ 計画通りいかなかった際の判断力
- ・ 子どもの自然体験活動に対する意義と価値の理解
- ・ 社会教育の目的・意義の認識
- ・ 子どもたちを自主的に行動できるように促す能力

- (2) 安全管理や安全指導の能力・知識

- ・ 事故等への応急処置に関する知識
- ・ 教員自らの野外活動、応急処置に関する基礎的な技術
- ・ 子どもの安全・保健面における判断力
- ・ 一般社会人としてのマナーと常識をもつこと
- ・ 教員自ら健康管理ができること
- ・ 子どもへの安全指導の能力
- ・ 子どもの心をケアする能力
- ・ 子どもが危険な場面、事故等に遭遇した際の対応能力

- (3) 自然体験活動に関する知識

- ・ 動植物、森林等の自然に関する知識
- ・ 自然体験活動を実施する場（海・山）の知識
- ・ 子どもの自然観察・自然理解を指導する技術
- ・ 自然環境の保全と活用に関する知識
- ・ 野外活動に関する知識
- ・ 自然の中から情報を読み取る能力
- ・ 教員自身に自然観察や野外活動等の経験があること

- (4) 自然体験活動のための企画・指導技術

- ・ 自然体験活動プログラムを企画・開発する力
- ・ 子どもに野外活動を指導する力
- ・ 子どもにレクリエーションやゲーム等を指導する力

- (5) プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力

- ・ 人権に配慮し、言葉遣いが正確で丁寧であること
- ・ 危機的状況に対する対応を予見しながらプログラムを推進する能力
- ・ 活動に協力してもらう人々との対人関係づくり能力
- ・ 教員の性格が明るいこと
- ・ 参加する子どもたちの相互人間関係づくりを支援する能力
- ・ プログラムの企画段階で状況の変化を予見する能力

- (6) 自然体験活動への関心・意欲

- ・ 自然に関する興味関心を持つこと

- ・自然体験活動への情熱
- ・自然体験活動を教員自らが楽しめる感覚、構え

## (7) 体力・健康

- ・教員自身に体力があること
- ・教員自身が元気であること

## 3. 野外活動についての実態調査

### 1) アンケートの概要

#### (1) 目的

- ・本学の野外活動（山キャン）に3泊4日で参加することによる、野外活動による効果を明らかにする。

#### (2) 対象

- ・野外活動を行った本学2年生（123人）

#### (3) 調査期日

- ・平成28年8月29日（月）（事前）
- ・平成28年9月2日（金）（事後）

#### (4) アンケート内容

下記の点について、4件法、及び記述法で調査を行った。

- ① キャンプ・野外活動の経験について（事前）
- ② キャンプなどを企画する団体への所属の有無（事前）
- ③ 野外活動の効果について（事前・事後）

※野外活動で培われる能力についての質問内容については、「小中学生自然体験効果測定尺度」、「リーダーシップ尺度」、「フォローワー尺度」を用いた手島（2015）の調査を参考に作成した。

### 2) 調査の結果と考察

#### (1) キャンプ・野外活動の経験について

結果は下図1のようになった。最も多いのは、「1～2回」で44人（38%）であり、次いで多いのは、「3～5回」で43人（37%）である。また、今回の野外活動が「初めて」という学生も

おり、「初めてから5回まで」の参加経験者は全体の50%を占め、キャンプ参加経験は、少ない学生が多い。

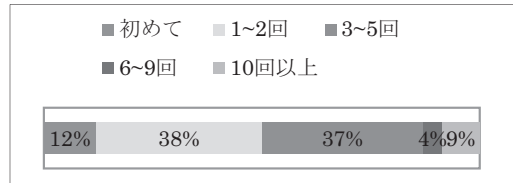


図1 キャンプの参加回数

その一方で、「10回以上」と答えた学生も全体の9%（14人）おり、様々なキャンプなどの活動に参加している学生や、ボランティアや団体に積極的に関わっている学生も見受けられるため、回数についてはばらつきが大きいと言える。

#### (2) キャンプなどを企画するボランティア団体への所属の有無

結果は、下図2の通りである。

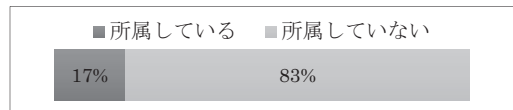


図2 ボランティア団体への所属の有無

この結果から、現在キャンプなどを行うボランティア団体に所属している学生は17%（16人）、キャンプなどを企画するボランティア団体に所属していない学生は83%（96人）である。

ボランティア団体に所属している学生の多くは、子どもを対象とした活動をしていることから、指導者としての視点をもって活動を行うことが可能であるが、結果からは所属している学生の割合は非常に少ないことが分かった。

#### (3) 野外活動の効果について

選択式アンケートでは、60項目について野外活動の事前と事後でアンケートを行い、その結

果について整理しまとめた。各質問項目の平均値を求め、事前調査と事後調査の結果を比較した。

事前調査と事後調査の結果は、14の分類で整理すると以下ようになった。

#### ①自己判断力

自己判断力の分類の質問項目についての結果は下表1の通りである。

下表1より、自己判断力については、平均値が質問項目1（0.18ポイント増）以外の項目において、約0.3ポイント以上向上しており、t検定でも全ての項目において、0.1%水準、或いは5%水準で有意差が認められた。自宅と別の場所で活動を行い、自分ひとりの力で言うことが

できることを感じ取ったことが理由であると考えられる。

#### ②自然への関心

自然への関心の分類の質問項目についての結果は下表2の通りである。

下表2より、自然への関心については、平均値が質問項目27（0.18ポイント増）以外の項目において、0.3ポイント以上伸びており、t検定でも全ての項目において、質問項目27を除き、0.1%水準で有意差が認められた。質問項目27については、事前調査の平均値や事後調査の平均値が小さく（2.19、2.37）、t検定においても有意差が見られなかった。この質問項目については活動内容の見直しが必要であると考えられる。

表1 自己判断力

質問番号	質 問 項 目	事前	事後	p 値	有意差
1	脱いだ服や持ち物はきちんと整理できる	3.55	3.75	0.022933	*
10	困っている友だちを助けてあげることができる	3.28	3.68	2.29E-08	***
20	暑い時や寒い時に自分で衣服を調整することができる	3.37	3.77	2.93E-08	***
28	出かけるときには、何が必要なのか自分で判断し必要な物を持っていくことができる	3.30	3.57	0.00115	***
33	必要な時に、ありがとう、ごめんなさいと言える	3.55	3.88	6.15E-08	***
35	朝、人に起こされなくても、自分で起きることができる	3.04	3.45	0.000112	***
50	決められた時間に遅刻しないで行くことができる（時間を守る）	3.25	3.66	0.012949	*

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。\*5%水準で有意差ありを示す。

表2 自然への関心

質問番号	質 問 内 容	事前	事後	p 値	有意差
12	天候の変化が敏感にわかる	2.80	3.37	6.98E-08	***
18	自然の中に行くとき新しい発見がある	3.11	3.64	1.98E-10	***
26	自然と人間の生活には深いかかわりがあると思う	3.44	3.89	1.21E-10	***
27	食べていい木の実や草を知っている	2.19	2.37	0.103435	n.s.
32	草花や自然の景色を見て感動することができる	3.28	3.74	5.09E-09	***
33	必要な時に、ありがとう、ごめんなさいと言える	3.55	3.88	6.15E-08	***
38	自然の中の活動は気持ちがいい	3.28	3.70	4.01E-07	***
41	季節の変化を感じることができる	3.18	3.55	6.53E-05	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。n.s.No Significance

また、今回の野外活動において、活動を行って学ぶことができなかったためだと考える。学生のアンケート結果からも、木の実や草についてもっと知りたいという意見が挙がっていることから、活動をもっと充実させることが必要だと考える。

### ③対人関係スキル

対人関係スキルの分類の質問項目についての結果は下表3の通りである。

下表3より、対人関係スキルについては、平均値が全体的に0.34ポイント以上伸びており、t検定においても0.1%水準で有意差が認められた。いずれの質問項目も活動で体験することのできるものだったため、効果があったと考えられ、活動において様々な関わりを持つことで得られた成長だということが分かる。

### ④自己成長性

自己成長性の分類の質問項目についての結果

は下表4の通りである。

下表4より、自己成長性については、質問項目4以外で、平均値が伸びており、t検定においても0.1%水準、1%水準、5%水準で有意差が認められた。質問項目4については、事前調査と事後調査を比較すると平均値がわずかだが、0.05ポイント低下している。これは、野外活動2日目において行った登山での経験から答えたことと推察できる。挑戦することに関して、あまり積極的に活動に取り組むことができなかったためと考察される。

### ⑤判断

判断の分類の質問項目についての結果は下表5の通りである。

下表5より、判断については、質問項目29、30、48において、事前で平均値が3点未満であったが、事後は0.34ポイント以上伸びて、平均値も3.2以上に伸びており、野外活動が有効

表3 対人関係スキル

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
9	新しい友だちを簡単に作れる	2.91	3.33	3.94E-05	***
44	だれとでも気軽に話ができる	3.13	3.50	8.3E-05	***
47	遊んでいる仲間にあとから加わることができる	2.94	3.30	0.000375	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。

表4 自己成長性

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
4	歩いている途中で疲れても、文句を言わないで歩き通すことができる	3.16	3.11 ↓	0.602783	n.s.
22	活動している途中で、失敗したとしても、自分で工夫して活動をやり通すことができる	3.20	3.50	4.29E-05	***
36	できないことがあるとできるようになるまで努力しつづける方だ	3.11	3.35	0.008841	**
40	みんなのできないようなむずかしいことに挑戦する方だ	2.83	3.05	0.021381	*
45	友だちよりうまくできないことがあっても、いやになったりせず頑張り通すことができる	3.14	3.40	0.000727	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。\*\*1%水準で有意差ありを示す。\*5%水準で有意差ありを示す。  
n.s.No Significance

であったことが窺われる。t 検定においても全ての項目で0.1%水準で有意差が認められた。判断する場面でたくさん活動を行うことによって学生自体の判断に対する意識が向上していることが窺われる。

#### ⑥忍耐

忍耐の分類の質問項目についての結果は下表6の通りである。

下表6より、忍耐については全体的に向上しており、t 検定の結果からも全ての項目において0.1%水準で有意差が認められ、忍耐の経験をする機会が多かったことが分かる。学生にとっては、1日中他人と集団生活をする経験はなかなか

かないため、そのような機会が増えたことが理由であると考ええる。

#### ⑦自信

自信の分類の質問項目についての結果は下表7の通りである。

下表7より、自信については、事前は全ての項目で平均値が3点未満であったが、事後は全体的に向上しており、t 検定において0.1%水準で有意差が認められ、活動を行うことによって実際に学生に自信が身についたことが窺われる。これは、学生同士が協力し、力を合わせて活動に取り組む機会が多かったことが理由であると考ええる。

表5 判断

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
23	状況に応じて素早く判断できる	3.09	3.39	0.000227	***
29	良い判断ができる（判断力が優れている）	2.81	3.25	9.32E-07	***
30	大事な場面で、明確な判断ができる	2.90	3.24	4.08E-05	***
48	予測をしていない事態にも、落ち着いて対応ができる	2.98	3.40	6.24E-07	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。

表6 忍耐

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
3	身体的な疲労や苦痛にも我慢することができる	3.27	3.57	0.00015	***
19	苦しい場面でも、辛抱することができる	3.22	3.58	4.02E-06	***
34	粘り強くものごとを遂行することができる	3.22	3.50	0.001193	***
49	忍耐力を発揮することができる	3.22	3.51	0.00039	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。

表7 自信

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
2	自信を持って、メンバーを説得することができる	2.65	3.12	1.75E-07	***
5	プレッシャーの下でも自信を持って、自分の能力を発揮することができる	2.72	3.03	0.00101	***
25	自信に満ちた行動をとることができる	2.84	3.23	1.86E-05	***
52	自信を持って、グループをまとめることができる	2.80	3.09	0.001952	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。



## ⑧規範

規範の分類の質問項目についての結果は下表8の通りである。

下表8より、質問項目6、24、42については活動後に平均値が0.28以上伸びており、t検定においても0.1%水準で有意差が認められた。しかし、質問項目53については、活動後に平均値が0.44ポイント下がり、3点を切っている。これは、仲間との関わりを通して、学生の意識が「自分が注意、声掛けができていないか」と内省することにより、認識を改めたことが理由であると考察される。

## ⑨責任

責任の分類の質問項目についての結果は下表9の通りである。

下表9より、責任については全体的に向上しており、平均値も全て3.45点以上に伸びている。t検定においても0.1%水準、或いは1%水準で有意差が認められた。これは、活動によって学生の意識が変わったことが理由であると考えられる。質問項目8が0.18ポイントと伸び率が低い、事前が3.25と元々高いことや、「自分の行動に責任を持つ」ことの難しさを、活動を通して、学生が感じたことが理由であるとする。

## ⑩三人称支援

三人称支援の分類の質問項目についての結果は下表10の通りである。

下表10より、三人称支援については、事前に平均値が3点以下の項目もあったが、事後は全体的に向上しており、t検定においても0.1%水

表8 規範

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
6	メンバーに、手本を示すことができる	2.65	3.04	3.6E-05	***
24	メンバーに、望ましい行動をとらせることができる	2.93	3.23	8.49E-05	***
42	メンバーに、規制（ルール）を守らせることができる	3.07	3.45	7.12E-06	***
53	メンバーに、時間を守らせることができる	3.46	2.99↓	8.59E-09	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。

表9 責任

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
7	一度掲げた目標を、責任をもって達成することができる	3.11	3.37	0.001506	***
8	自分の行動に責任を持つことができる	3.25	3.46	0.008067	**
13	自分の意見に責任を持つことができる	3.05	3.45	1.04E-06	***
16	他者への責任を意識することができる	3.23	3.50	0.00047	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。\*\*1%水準で有意差ありを示す。

表10 三人称支援

質問番号	質問内容	事前	事後	p 値	有意差
14	グループ間のもめごとを上手に和解させることができる	2.82	3.20	5.49E-05	***
46	グループ内の雰囲気をよくすることができる	3.09	3.41	0.000422	***
51	グループ間の問題を解決させることができる	2.98	3.19	0.01299	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。

準で有意差が認められた。グループで活動する時間が多いため、活動によって学生の意識が変わったことが理由であると考えられる。

#### ⑪状況察知

状況察知の分類の質問項目についての結果は下表11の通りである。

下表11より、状況察知については、全体的に0.29ポイント以上伸びており、t検定においても0.1%水準、或いは5%水準で有意差が認められた。これは、活動によって学生の意識が変わったことが理由であると考えられる。

#### ⑫二人称支援

二人称支援の分類の質問項目についての結果は下表12の通りである。

下表12より、二人称支援については質問項目11、39、43については活動後、約0.3ポイント以上増加しており、t検定においても0.1%水準

で有意差が認められた。この結果については、活動によって学生の意識が変わったことが理由であると考えられる。しかし、質問項目54については、活動によって学生ができなかったという意識があることが考えられる。また、自分以外の人と関わる機会が多く、様々な二人称支援が行われることが理由であると考ええる。

#### ⑬集団規範

集団規範の分類の質問項目についての結果は下表13の通りである。

下表13より、集団規範については全体的に向上しており、t検定においても0.1%水準で有意差が認められた。活動によって学生の意識が変わり、集団生活をする中で、体験的に集団規範を身に付けることができることが理由だと考える。

表11 状況察知

質問番号	質 問 内 容	事前	事後	p 値	有意差
17	リーダーを求めていることを上手にサポートできる	3.09	3.50	1.1E-06	***
21	リーダーが要求することを察知することができる	3.23	3.54	0.02493	*
31	その場の雰囲気を読むことができる	3.29	3.88	0.035341	*

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。\*5%水準で有意差ありを示す。

表12 二人称支援

質問番号	質 問 内 容	事前	事後	p 値	有意差
11	時間を守ることができる	3.40	3.71	3.14E-05	***
39	リーダーの気持ちを理解することができる	3.22	3.57	1.72E-05	***
43	リーダーの考えに同意することができる	3.34	3.65	3.58E-05	***
54	リーダーを支援するために働くことができる	3.60	3.31 ↓	9.82E-05	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。

表13 集団規範

質問番号	質 問 内 容	事前	事後	p 値	有意差
15	規則（ルール）を守ることができる	3.46	3.70	0.000786	***
37	望ましい行動をとることができる	3.13	3.43	0.000183	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。



## ⑭体験

体験の分類の質問項目についての結果は下表14の通りである。

下表14より、体験については全体的に向上しているが、質問項目56、57以外は、t検定において0.1%水準、或いは5%水準で有意差が見られた。しかし、質問項目56、57については、結果から事前調査、事後調査ともに平均値が低い(2.53→2.69、2.59→2.83)。この原因とし

ては、昆虫を捕まえる体験や、大きな木に登る体験の不足が理由であると考えられる。今後の野外活動において、実際に身近な自然に触れる活動を取り入れる必要があると考える。

## (4) 野外活動における指導者として育てたい能力について

上記の野外活動の事前・事後の変容については、「小中学生自然体験効果測定尺度」、「リー

表14 体験

質問番号	質 問 内 容	事前	事後	p 値	有意差
55	ナイフや包丁で、皮をむいたり、野菜を切ったりすることができる	3.35	3.55	0.032442	*
56	チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえられる	2.53	2.69	0.260463	n.s.
57	大きな木に登ることができる	2.59	2.83	0.072451	n.s.
58	太陽が昇るところや沈むところを見たことがある	3.19	3.85	4.73E-11	***
59	夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たことがある	3.45	3.90	9.49E-09	***
60	野鳥を見たり、鳴く声を聞いたりしたことがある	3.42	3.90	2.01E-08	***

\*\*\*0.1%水準で有意差ありを示す。\*5%水準で有意差ありを示す。n.s.No Significance

表15 野外活動における指導者として資質能力と測定尺度14分類との関係

能力	野外活動での 共通理解と 集団指導力	安全管理や 安全指導の 能力・知識	野外活動に 関する 知識・成長	野外活動の ための企画・ 指導技術	状況予測力 と対人関係 能力	野外活動 への関心・ 意欲	体力・健康
自己判断力			○	○	○		
自然への関心	○		○	○		○	○
対人関係スキル					○		
自己成長性				○		○	
判断			○	○	○		
忍耐			○	○			○
自信			○			○	
規範		○		○		○	
責任		○		○			
三人称支援			○	○	○		
状況察知		○		○	○		
二人称支援			○		○		
集団規範	○	○					
体験	○		○	○	○	○	○

ゲーシップ尺度」、「フォロワー尺度」を基に、14分類で考察した。この14分類を、上述の野外活動における指導者として資質能力別に上表15のように整理した。

また、野外活動において指導者に必要な能力別に実態調査尺度を整理し、t検定により1%水準、或いは0.1%水準で有意差が認められた項目の割合と事前から事後への成長率をまとめたものが、下表16である。

まず、表15の整理にしたがって、指導者に必要な能力別に測定尺度の14分類ごとの総質問数を分母に、t検定により有意差が見られた項目数を分子にして表した。右端の成長率は、指導能力ごとに平均値が伸びた項目の割合を示したものである。

この表からどの指導能力も70%以上の割合で変容が見られる。また、一番伸びている能力は、野外活動に関する知識・成長の能力であるということが分かる。このことから、実際に野外活動を行うことが、指導能力の向上に寄与していることが考察できる。しかし、測定尺度分類の内、「体験」「状況察知」の面においては成長率

が低い項目があり、「自然への関心」「自己成長性」「規範」「二人称支援」では事後に平均値が下がった項目も見られた。また、「体験」では、平均値が3.00未満のものも見られた。

以上の点に配慮して、今後の野外活動の内容を見直していく必要があると考える。

#### 4. まとめ

学生への野外活動の事前事後調査結果から、自然の中で日頃はしない体験をすることを通して、自分の能力の把握や自然の力を認識することができるようになっていることが窺われた。自分の能力については、「大変だったけどやり通せた」「友達に対してはしっかりと大切なことを言えた」（調査結果より）という経験があったからこそ、今の自分の能力をしっかりと把握できたと考察される。

このことから、実際に活動をすることで、正しく把握できていなかった「自分の能力」について認識し、自分のできることについてもっと知ることができたと考える。また、野外活動をすることによって、体験を増やすだけでなく、

表16 t検定により有意差があった項目の割合と事前から事後への成長率

指導能力	t検定により1%水準、0.1%水準で有意差が認められた項目数/全項目数	成長率
野外活動での共通理解と集団指導力	集団規範2/2、自然への関心7/8、体験3/6	12/16 (75%)
安全管理や安全指導の能力・知識	規範3/4、責任4/4、状況察知1/3、集団規範2/2	10/13 (77%)
野外活動に関する知識・成長	三人称支援3/3、二人称支援4/4、体験3/6、自信4/4、忍耐4/4、判断4/4、自己判断力5/7、自然への関心7/8	34/40 (85%)
野外活動のための企画・指導技術	三人称支援3/3、規範3/4、体験3/6、自己成長性3/5、忍耐4/4、責任4/4、状況察知1/3、判断4/4、自己判断力5/7、自然への関心7/8	37/48 (77%)
状況予測力と対人関係能力	三人称支援3/3、二人称支援4/4、体験3/6、状況察知1/3、判断4/4、対人関係スキル3/3、自己判断力5/7	23/30 (77%)
野外活動への関心・意欲	規範3/4、体験3/6、自己成長性3/5、自信4/4、自然への関心7/8	20/27 (74%)
体力・健康	体験3/6、忍耐4/4、自然への関心7/8	14/18 (78%)

自身の内面における自己肯定感が高まり、活動についてより積極的に取り組むことができるのではないかと考察する。

このことから、次の3点が明らかとなった。

- ・実際に活動をすることで、「自分の能力」について正確に認識できる。
- ・学生の意識を高め、指導能力の育成ができるカリキュラム編成をする必要があること。
- ・活動項目をもっと余裕を持った時間配分で行うことが望ましいこと。

また、他大学の野外活動のカリキュラムと本学の野外活動のカリキュラムを比較・検討し、今後野外活動を行う上で、次の3点に留意する必要があると考える。

- ・3泊4日の山キャン日程はそのままでカリキュラム編成を行う。
- ・学生が活動を企画し、運営をする経験をするためのカリキュラムをより効果的に編成する。
- ・事前・事後学習を充実させ、より効果的なカリキュラム編成を行う

以上の3点に留意し、カリキュラムを再考し、事前・事後学習を充実させることによって、学生の興味・関心を高めるだけでなく、活動をより主体的に、指導者の視点を意識しながら行うことができ、野外活動の指導者としての指導能力を育成していくことができると考える。

## 【引用・参考文献・URL】

- 川西正行. (2010). 初等教育学入門. pp. 91-101. 広島文教女子大学
- 公益社団法人 日本シェアリングネイチャー教会. <http://www.naturegame.or.jp/know/activity/> 2016. 12取得
- 国立教育政策研究所. 平成27年度全国学力・学習状況調査の結果について. <http://www.nier.go.jp/15chousakekkahoukoku/summary.pdf> 2016. 12取得
- 国立青少年教育振興機構. 学校教育における体験活動の意義. <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/60/File/09honbu0404.pdf> 2016. 12取得
- 小林辰至. (2000). 原体験を基盤とした科学的問題解決学習のモデル化に関する研究. 博士論文. 兵庫教育大学
- 小林辰至. (1992). 理科学習の基盤としての原体験の教育的意義. 日本理科教育学会研究紀要, 33(2): pp. 53-59
- 小林辰至・五島政一. (2010). 教員養成課程学生の自然観察的な自然事象の気づきに影響を及ぼす要因の検討. 理科教育学研究, vol. 51, No. 2: pp. 21-27
- 渋谷健治. (2006). 青少年の自然体験活動. 生涯学習研究 e 事典 <http://ejiten.javea.or.jp/content.php?c=TWpneU1ETTA%3D> 2016. 9取得
- 杉山浩之. (2010). 初等教育学入門. pp. 81-91. 広島文教女子大学
- 信州大学シラバス. <http://campus-2.shinshu-u.ac.jp/syllabus/syllabus.dll/Display?NENDO=2016&BUKYOKU=E&CODE=E5016900> 2016. 12取得
- 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議. (1996). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm) 2016. 10取得
- 中央教育審議会. (2008). 新しい時代に求められる青少年教育の在り方 (2016. 10取得)
- 内閣府. 子ども・若者白書. <http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/index.html> 2016. 11取得
- 日本教育新聞社. <http://www.kyoiku-press.jp/tesio/archives/64> 2016. 11取得
- 別惣淳二・長澤憲保・上西一郎・山秀樹. (2003). 自然体験活動指導に求められる教員の資質能力に関する調査研究. 学校教育学研究. 第15巻, pp. 1-12. 兵庫教育大学 <http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/811/1/AN100700980150001.pdf> 2016. 11取得
- 兵庫県自然教室. (1993). 自然観察マニュアル. 長征社

- 広島大学シラバス.  
[https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/syllabusHtml/2016\\_03\\_CC114401.html](https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/syllabusHtml/2016_03_CC114401.html) 2016. 9取得
- 広島修道大学シラバス.  
[http://syllabus.shudo-u.ac.jp/Syllabus/2016\\_03305101.html](http://syllabus.shudo-u.ac.jp/Syllabus/2016_03305101.html) 2016. 9取得
- ベネッセ教育総合研究所. (2010).  
[http://berd.benesse.jp/berd/berd2010/feature/feature05/yatagai\\_02.html](http://berd.benesse.jp/berd/berd2010/feature/feature05/yatagai_02.html) 2016. 11取得
- 宮下 治. (2012). 学校教育における野外自然体験活動の実態と課題に関する研究—教師の意識を踏まえて—. 理科教育学研究, 7月号, vol. 53, No. 1: pp. 133-144.
- 文部科学省. (2009). 小学校学習指導要領. 東京書籍
- 文部科学省. (2008). 小学校学習指導要領理科編. 大日本図書
- 文部科学省. (2013). 新学習指導要領における体験活動に関する記載.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/010/attach/1301827.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/010/attach/1301827.htm) 2016. 11取得
- 文部科学省. 青少年の野外教育の充実について.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm) 2016. 11取得
- 文部科学省. 青年の家・少年自然の家の利用促進について.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19850116001/t19850116001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19850116001/t19850116001.html) 2016. 11取得
- 文部科学省. 体験活動事例集.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm) 2016. 9取得
- 安田女子大学シラバス.  
[http://rss.yasuda-u.ac.jp/public/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL\\_SyllabusSansho.aspx?P1=81010000&P2=2016&P3=20161001](http://rss.yasuda-u.ac.jp/public/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL_SyllabusSansho.aspx?P1=81010000&P2=2016&P3=20161001) 2016. 11取得
- 山口慶薫. (1999). ゲーム・ソング研究会資料.  
[http://scout802.jp/old/district\\_info/2009/100307\\_song&game.html](http://scout802.jp/old/district_info/2009/100307_song&game.html) 2016. 10取得
- 養成と採用・研修との連携の円滑化について. (1999). 文部科学省.  
[http://www2.kobe-c.ed.jp/rgd-ms/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=1865](http://www2.kobe-c.ed.jp/rgd-ms/?action=common_download_main&upload_id=1865) 2016. 11取得